

映像で振り返る石井桃子さんの生涯 講演録

石井桃子さんは、創作児童文学『ノンちゃん雲に乗る』が昭和26年に第1回芸術選奨文部大臣賞を受賞し、ベストセラーとなったほか、『ピーターラビットのおはなし』や『ちいさなうさちゃん』の翻訳者として知られています。石井桃子さんはさいたま市出身で、その生家は、現在のさいたま市浦和区にありました。幼い頃の情景を鮮明に記憶していた石井桃子さんは、70歳になって浦和で過ごした幼年時代を振り返り、雑誌に連載を始めました。それが、『幼ものがたり』（福音館書店）です。

その石井桃子さんについて、2015年に「石井桃子の挑戦」と題したドキュメンタリー映画が製作されました。「Ⅰ ノンちゃん牧場」と「Ⅱ 子どもと文学」です。そして、2017年には、第3弾として「Ⅲ かつら文庫」が完成されました。

2017年は、さいたま市立中央図書館が開館から10周年を迎え、また、さいたま市にゆかりのある児童文学者・石井桃子さんの生誕110年の記念の年でもありました。図書館では、映画を製作した森英男監督をお招きし、映画のⅠ・Ⅱの上映会を行うとともに、石井桃子さんの生涯についてご講演をいただきました。講演会開催の記録としてご紹介いたします。



Ⅰ・Ⅱ・Ⅲともに DoDo 企画 kasabutakun FILM 製作



森英男監督

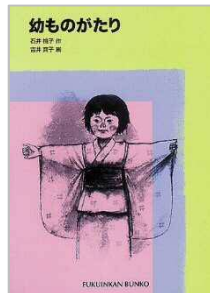
はじめに

浦和は瀬田貞二さん、石井桃子さんのお二人が住んでいらっしゃった場所であり、児童文学の聖地ですね。こうして石井さんのドキュメンタリー映画を上映させていただけることを大変光栄に感じています。石井さんの誕生日は、1907年（明治40年）3月10日で、亡くなられたのは2008年（平成20年）4月2日です。東京神楽坂の瑞光寺にあるお墓には、石井さんの手がけられた6作品『ノンちゃん雲に乗る』『幼ものがたり』『幻の朱い実』『くまのプーさん』『ピーターラビットのおはなし』『ムギと王さま』の題名が刻まれ、これらの作品をもって記憶されることをよしとする石井さんの想いが込められています。

石井さんは晴れがましいことが大嫌いな方でした。石井桃子さんの生涯をたどっていくと、その活動は創作と翻訳だけではありません。読書運動、図書館の普及、子どもの本全体にわたって活躍なさっています。明治、大正、昭和、平成と生き続けられていて、石井さんの生涯は近代女性史そのものです。今は若い人たちがすごく内向きになっています。そういう後続く若い人に、男女を問わず若い人に石井さんの生き方を知っていただきたい。そういう風に考えて、僕は映画を作りました。



1



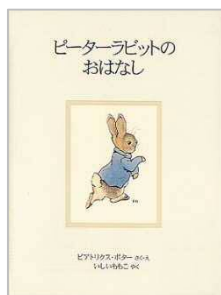
2



3



4



5



6

表紙画像：

- 1 『ノンちゃん雲に乗る』石井桃子／著 大地書房／刊
- 2 『幼ものがたり』石井桃子／著、福音館書店／刊
- 3 『幻の朱い実』石井桃子／著、岩波書店／刊
- 4 『熊のプーさん』A・A・ミルン／作、石井桃子／訳、岩波書店／刊
- 5 『ピーターラビットのおはなし』ビアトリクス・ポター／作・絵、石井桃子／訳 福音館書店／刊
- 6 『ムギと王さま』エリナー・ファージョン／作、石井桃子／訳、岩波書店／刊

幼ものがたりの頃



(浦和の生家にて 母親に抱かれているのが桃子さん)

石井さんがお生まれになった明治時代の浦和から、1945年の終戦の年までをお話します。

『幼ものがたり』は、石井さんが74歳のときに福音館書店から出版された、石井さんの代表作です。浦和を舞台に大家族の中で育った石井さんの幼い頃の記憶を書き留めた自伝的作品です。石井さんの世界はここから始まりました。ものの見方、感じ方がすでに生まれています。

浦和というところは商業、学問の中心だと思います。それと宿場町、外部からいろんな情報や物が入ってきたと思います。江戸と京都を内陸で結び木曾街道と呼ばれていました。日本橋を起点として板橋、蕨そして浦和。江戸から六里、浦和は3番目の宿場町です。想像してみてください。明治時代の浦和。この頃のお風呂や夜のお手洗いは真っ暗です。ロウソクにランプ、提灯しか明かりはありません。通りを通る牛や馬の匂い、豚小屋の懐かしい匂い、たぶん晴れた今日みたいな日は街道の空でトンビが鳴いていたと思います。朝は町中で薪や炭の燃える匂い、雨戸を開ける音と、荷車が通るガラガラガラという音で朝は始まったのだと思います。「幼ものがたり」は街道から鉄道へ、ランプから電気へと近代化が始まる頃のお話です。

明治40年3月10日、石井さんは8人きょうだいの末っ子として生まれました。おじいさんとおばあさん、お父さんとお母さん、お姉さん4人にお兄さん1人、それに石井家の名物男まあちゃんを含め総勢11人の大家族です。おじいさんは中仙道に面して金物屋「釜屋」を営んでいました。お父さんは小学校の教師を務めた後、友人と商業銀行を興して支配人を務めていました。

石井さんが67歳のとき、きょうだい全体が亡くなり、あのときはこうだった、このときはあだったと昔話のできる相手がいなくなりました。そのとき、不思議なことが起こります。少し前までおじいさん、おばあさんだったお兄さんやお姉さんはかき消えて、石井さんが4・5歳だった頃の若者や娘の姿になって心に戻ってきました。石井さんは抜群の記憶力を持っていました。2歳の夏家族で写真を撮った時、自分がむずかったことを記憶しています。自分の心の底に埋もれていた感覚を呼び起こし、もう一つの世界に入り込むことを、石井さんは子どものための物語

はこんなふうに生まれるのではないかと述べています。

石井家では夕食後の団らんのときに、おじいさんがお話をしたり、子どもたちが順番にお話をしたり、一家団らんの時間があつたとお聞きしています。岩波の子どもの本に収録されている『おそばのくきはなぜあかい』は、おじいさん直伝の昔話だそうです。石井さんは6人きょうだいの末っ子で、一番上の“初”お姉さんとは16歳も歳が離れています。石井さんと本との出会いは、この初お姉さんに読んでもらった本から始まりました。

とても面白いことに、石井さんは小学校2年生になるまで字が読めませんでした。ご家族は何も思わなかったのでしょうか。字が読めない中、1人であれこれ考えをめぐらせることはとても大事なことです。このことを石井さんは幼い思索といっています。子どもはみな同じように身体全体で世界を認識していくのですが、幼児健忘症といって、その頃の記憶や感覚を忘れてしまいます。石井さんはこの子ども時代の記憶を忘れずにすぐに思い出せたのではないのでしょうか。「子どもの本のあいだでさまよう」というエッセイの中で石井さんは、この幼児健忘症にかかりにくい人間もいるのではないかと述べています。石井さんの鋭い感受性は、ここに根ざしていると思います。

『幼ものがたり』で注目すべきところは5つあります。1つ目は言葉を獲得する前の石井さんが全身を使って身の回りの世界を認識していったこと。この感覚、意識はたぶん言葉で表現できるものではありません。2番目はこの時期に豊かな自然とおおらかな人間関係があつたこと。3つ目はおじいさんの昔話に出会っていること。4つ目は初めて本から文学的な感動を得ていること。5つ目は幼い頃の感覚や気持ちをいつでも思い出すことができたこと。

『幼ものがたり』は、やはり石井さんの代表作だと思います。

学生時代

石井さんは12歳のとき、大正8年に埼玉県立浦和高等女学校（現・浦和第一女子高等学校）へ入学します。石井家の兄妹はとても勉強ができたと聞いております。石井さんとは歳が12歳離れたお兄さんは商社に勤めていてタイやビルマなどに駐在されていて、現地で撮影された白い三つ揃いのスーツを着ている写真も残されています。大正13年の4月に石井さんは日本女子大学（現・日本女子大学）に入学します。日本は大正デモクラシーとともに新しい時代を迎えていました。近代化が進み、人々の暮らしは飛躍的に変化します。女性の自立と解放が叫ばれ、女性文化が高まり始めた時期でした。石井さんが入学した前年には関東大震災が起きました。日本の経済が弱体化して、長く続く不況のなか、労働運動が頻発していました。庶民にとって大学へいくことなどとてもない時代のことです。そのうえ石井さんが選んだのは英文科でした。石井さんは大学に入学の際、自分は嫁入り道具の代わりに教育にお金を出してもらった、卒業後は働くのだと心にきめていました。お姉さんたちの結婚を見て、結婚はつまらないものだと感じたそうです。女性の社会進出が注目されていましたが、まだまだ男尊女卑が世間の常識でした。女性には選挙権はなく、東京帝国大学に女性は入学を許されません。聴講生だけです。女に学問は必要ないと考えられていました。日本女子大学は女子専門学校です。女子教育に大きな理想を持ち、平塚らいてう、宮本百合子、田村俊子など、多くの文学者を輩出しましたが、当時は良妻賢母を掲げた厳格な学校でした。

石井さんは、大学3年生のときに、共同研究「世界の女性文化」に取りかかります。様々な国の女性作家についてテーマを決めて研究するものでした、最新の情報を手に入れるため、各国の出版社に直接手紙を出して資料を取り寄せました。石井さんは生涯愛読するウィラ・キャザーという女流作家に出会って読み始めます。また、この頃、フランスの女流作家のことを尋ねるために、作家の岸田國士に会いに行っています。岸田國士は数年前にフランスから帰国した新進気鋭の劇作家でした。石井さんは次第に外国と文学に近づいて行動的になっていきます。石井さんの叔父さんは船会社に勤めて欧州航路を回っている人でした。石井さんはごく自然に英文学を学び、英語をいかす仕事に向かっていきました。この頃のエピソードに大学3年生頃だったと思いますが、ひと夏、御殿場のアメリカ人家族のハウスキーパーのアルバイトをします。ここでレモネードの作り方を会得します。また煮沸消毒も知ります。浦和の実家の塗りのお椀に試みて、お椀を熱湯に入れて全部だめにしたエピソードを中川李枝子さんから聞きました。ベッドメイキングも会得して、石井さんは生涯ベッドでお休みになって、少し硬めのオックスフォードの布でできた木綿のシーツに足を伸ばすのがお好きだったそうです。今ゴムのついた箱型のシーツがありますが、そういうものは断固として拒否されていたと聞いています。誰もが感じる石井さんの印象は物静かで穏やかですが、とんでもないことです。思い込んだらどんどん進んでいくという情熱的な心をお持ちの方だったと思います。

編集者として

石井さんは日本女子大学校に在学中の頃から、友人の紹介で菊池寛のもとで外国の雑誌や原書を読んであらすじを書くアルバイトをしていました。菊池寛は早くから女性の社会進出に協力的で、後に文筆婦人会というグループを作り、高等教育を受けながら職の得られない女性に、口述筆記や翻訳などの働く機会を与えました。

昭和4年に大学を卒業した石井さんは、引き続き文藝春秋社の仕事をして、翌年には本格的に編集者としての活動を始めます。『文藝春秋』『モダン日本』『婦人サロン』など、当時最先端の雑誌の編集に携わり、志賀直哉、里見弴、横光利一、犬養健、川端康成など文学者たちとの仕事が始まりました。中でも書庫の整理を手伝うことになった犬養家の人々とは後年まで温かい交流が続きます。この時期に後に親友となる小里文子さんに出会います。この小里文子さんこそが石井さんの自伝的小説『幻の朱い実』の落子さんのモデルです。それと、荻窪にある石井邸の元の持ち主です。石井さんが編集に携わった『モダン日本』は当時の最先端の都市生活者、シティボーイの雑誌でした。そして、この頃の石井さんは洋装で短髪のモガスタイルでした。

昭和7年5月15日に5・15事件が起こります。犬養毅首相は中国へ進出しようとする軍部と対立、海軍の青年将校たちに暗殺されます。犬養家を襲った暗黒の事件でした。この事件を境に日本は軍国主義へと向い始めます。昭和8年、石井さんは事件の影響で来訪者も少なく、さびしくなった犬養家に通い続けました。西園寺公一さんから犬養康彦さんに贈られたプー横丁にたった家の原書には、奥付に「康彦君 1933 X マス公一 パパカ ママカ ミッチャン ニ ヨンデ オイタダキナサイ」と書かれています。この原書を石井さんが読み始めたことが、石井さんと『プー横丁にたった家』との最初の出会いです。

児童文学の世界へ

昭和10年6月、山本有三のもとで、日本少国民文庫の編集の仕事が始まります。編集長は吉野源三郎、執筆翻訳に高橋健二、吉田甲子太郎、岸田國士ら若手の学者や作家が登用され、新鮮な企画が考えられました。「俗悪な読み物から子どもを守り、進歩的な思想や豊かな感情を育成するために、少年少女の未来に希望を抱かせる」こういう考えのもとに作品が選ばれました。軍国主義へ向かい、検閲の厳しい時代でしたが、少年少女向けの出版は許可されていました。石井さんは最も若い編集部員で参加しています。そして、編集の傍ら2つの短編『一握りの土』、『わが橈犬ブリン』を翻訳しました。シリーズには多くの優れた作品が収録されましたが、中でも『人はなんで生きるか』（トルストイ／著）、『君たちはどう生きるか』（吉野源三郎／著）は、希望と勇気、平和を求める気持ちを少年少女に与えました。後年に、美智子皇后や黒柳徹子さんがこの全集を愛読したことを述べられています。

昭和13年、石井さんは犬養伸子夫人の援助を得て、白林少年館という子どもたちのための図書室を始めます。犬養家の敷地内にあった犬養首相の書庫を転用しました。石井さんは、お母さんと小里文子さんの看病をしながら本格的に翻訳の仕事をしていました。『プー横丁にたった家』、そして『熊のプーさん』は岩波書店に移った吉野源三郎さんに託して出版しています。さらに、友人たちと白林少年館という出版社を作って、『たのしい川邊』（グレアム／著、中野好夫／訳）、『ドリトル先生アフリカ行き』（ロフティング／著、井伏鱒二／訳）を出版しています。ドリトル先生は石井さんが下訳をして、井伏鱒二さんに翻訳を頼みました。現在も読み継がれるこの4冊には石井さんの強い願いが込められています。



1



2



3



4

表紙画像：

- 1 『熊のプーさん』A・A・ミルン／作、石井桃子／訳、岩波書店／刊
- 2 『プー横丁にたった家』A・A・ミルン／作、石井桃子／訳、岩波書店／刊
- 3 『たのしい川邊』ケネス・グレアム／作、中野好夫／訳、白林少年館／刊
- 4 『ドリトル先生「アフリカ行き」』ヒュー・ロフティング／著、井伏鱒二／訳、白林少年館／刊

戦争の影

昭和15年に大政翼賛会が組織されます。この時代のことはようやく最近になって資料が公開されてわかってきました。大政翼賛会というのは、今、我々が考えているような、いわゆるナチス的なものではなく、昭和研究会という近衛さんの私的な政策研究会が元になっています。「軍部が独裁的でこれを抑えるために新しく国民の力を結集しよう」「一国一党の強力な政治体制を目指

そう」大政翼賛会は、最初は、近衛文麿を中心としたリベラルな新体制運動でした。テーマは日米戦争の回避。西園寺公一さんは外務省の囑託として軍部を抑える役目を近衛さんから命令というか、お願いしますと言われたそうです。それが、あれよあれよという間に軍部に骨抜きにされて近衛さんもおかしくなってしまう。この大政翼賛会の初代文化部長は岸田國士、二代目の文化部長は高橋健二です。少国民文庫の編集部のメンバーです。高橋健二は戦後ケストナーを翻訳しています。もちろん山本有三さんも近衛首相のブレーンでした。山本有三は近衛さんとは高校時代から親友でした。この文化部の初仕事が少国民文化協会の設立です。協会の事務所は銀座の三越の6階に設置されていました。この少国民文化協会というのは、美術、文学、演劇映画、紙芝居など子ども向けのあらゆる児童文化を統制し指導することを目的に設立され、ほとんど全ての児童文学者が加入していました。この、設立準備の仕事会員名簿作りを石井さんはやっています。新潮社の日本少国民文庫の関係者と近衛内閣のブレーン、大政翼賛会文化部のメンバーは重複しています。この山本有三たちの日本少国民文庫のメンバーは少国民文化協会に属します。この交友関係、犬養家関係、犬養健さんや西園寺公一さん、石井桃子さんは直接関係なくても、5・15事件、大政翼賛会、ゾルゲ事件にとっても近い位置にいたことが推測されます。これらの人脈は、当時の自由主義者の繋がりであり、戦争回避リベラルな人たちの繋がりだったのです。石井さんたちはヒューマンイズムの最後の砦、新潮社から出た日本少国民文庫の考えと精神を再び広めようとしていました。感動的な書物を与えて少年少女の未来に希望を抱かせよう、しかし、リベラルやヒューマンイズムなどは時の波に押しつぶされていきます。石井さんは一切このことを記されていません。ここでの挫折と反省が戦後の活動の大きな力になっているのではないかと思います。

昭和16年12月8日、日本軍は真珠湾を攻撃して、アメリカ、イギリスとの戦争が始まります。国全体が猛烈な勢いで戦争に進んで行き、子どもの本も不要なものとされました。石井さんは戦前に手に入れた『小さな牛追い』の翻訳と『ノンちゃん雲に乗る』を友人たちのために書くことだけが心の支えとなっていました。その頃、石井さんは川崎にあった軍需工場で狩野ときわさんと出会います。二人は戦後、宮城県栗原郡鶯沢村（現・栗原市鶯沢）で開墾を始めると、やがて乳牛を入手し、「ノンちゃん牛乳」と名づけて、酪農経営に携わります。



(写真提供／公益財団法人 東京子ども図書館)

岩波少年文庫と岩波の子どもの本の創刊、そして…

「岩波少年文庫」が昭和25年12月、そして「岩波の子どもの本」が昭和28年12月に、それぞれ創刊しました。この2つのシリーズの登場は画期的なことでした。多くの方が子供時代にお読みになったと思います。この編集主任を任されたのが石井さんでした。岩波少年文庫創刊当時の5冊『宝島』（スティープンソン／著、佐々木直次郎／訳）、『あしながおじさん』（ウェブスター／著、遠藤寿子／訳）、『クリスマス・キャロル』（ディケンズ／著、村山英太郎／訳）『小さい牛追い』（ハムズン／著、石井桃子／訳）、『ふたりのロッテ』（ケストナー／著、高橋健二／訳）は、初版2万部が発売から3か月で売り切れました。しかしその後、思ったようには売れていない。編集部は都内の小学校を訪問調査及びハガキによるアンケート調査をしました。ここに編集部のレポートがあります。児童の読書の現状、岩波書店の児童向け出版物の進むべき方向という、いぬいとみこさんの署名原稿を紹介します。東京都内の小学校、慶應幼稚舎、赤坂の氷川小学校、江東区の浅間小学校、教育大付属の小学校を訪問調査しています。それ以外の小学校100校へハガキでアンケート調査、それと神田に当時あった児童書の専門店「森田屋」さん。この書店は都内・地方合わせて200校の学校図書館と取引がありました。この3か所で調査をしています。まず当時の学校図書館でもっとも購入されて読まれている本は何か。一番は講談社の世界名作全集、2番目は偕成社ポプラ社の伝記もの、3番目は小峰書店、あかね書房の低学年童話と絵ばなしのたぐい、そして4番目は保育社の図鑑でした。岩波の本は入っていません。なぜ購入されないのか。こういう答えが返ってきました。初期の少年文庫はソフトカバーで製本がしっかりしていない。ハードカバー以外の本は図書館の本になりえない。表紙が地味すぎて子どもが馴染まない、デザインが渋すぎたんですね、本の形が小さくて大人の本のよう。挿絵が少なく難しそう、内容に関しては、岩波のものは内容が難しい、これは現場の学校の先生が仰っています。2番目読めない字わからない言葉がある、小学生の学力と読書能力に対応していない、また少年文庫には日本人の創作、作家をそだてることができなくて、翻訳作品ばかりになっていることも理由に挙げられています。当時の翻訳家の名前を見ていきますと、その道の英文学や英文学者、大家が翻訳していました。文中で岩波書店は「学校の教師は岩波の出版物の優れた所を認めてくれて、図書館に置いてくれると予想していたのが見事に裏切られて愕然とした」と書かれています。慶應幼稚舎には岩波書店は調査のために無料で全巻配布していました。教育大付属には少年文庫は例外的に全部揃っていたそうです。また学校の先生の読書指導のおかげでこの2つの学校は良く読まれていた。しかしほとんどの小学校で岩波の本は備えられていないのが現状でした。レポートは結論として「小学校中級以下の子どもに少年文庫を普及させるのは不可能。少年文庫は中学生以上に限っていき、童話的なもの低学年用の内容のものは別のシリーズに入れるべきだ」と言いきっています。岩波の児童出版を本格的にしていこうとするなら、「良心的な絵本から始めて、少年文庫に繋げるのがいいのではないか」と提言しています。ここから生まれたのが岩波の子どもの本のシリーズです。

昭和29年、石井さんはロックフェラー財団の研究員として1年間の海外留学の旅に出ます。アメリカ、カナダ、ヨーロッパの児童図書館や図書館員、作家らと交流し、子どもの本はどうあるべきかを目の当たりにします。そして、留学から帰国後、石井さんはすぐに日本の子どもたちの厳しい現実に向き合います。石井さんはアメリカのアジア財団*から家庭文庫みたいなものを

始めたらどうかという誘いを受けます。村岡花子さんが昭和27年に、土屋滋子さんが昭和30年に家庭文庫をすでに始めていました。ところが、石井さんは「そういう気持ちにならない」ときっぱりと断っています。読書力がある子どものことは、岩波のレポートでわかっていました。でも石井さんは「優秀な子どもたちの為だけに子どもの本はあるのではない。毎日様々な日常をくぐりぬける普通の子どものために本を作る」そういうことで、鶯沢で2年間毎週1時間の国語の授業をもらって、2年間読み聞かせをしたのだと思います。坪田譲治との論争にも一歩も引いていません。朝日新聞の新聞紙上で論争をしています。当時は、すごく風通しが良かったんだと思います。何よりも適切な本がない、公共図書館がまだ頼りない、母親たちにも啓蒙しました。石井さんは子どもの本全般を0から引っ張っていったと言えるんじゃないかと思います。

昭和33年、石井さんは荻窪の自宅に家庭文庫「かつら文庫」を開きました。文庫での石井さんは、子どもたちの中でも特に幼い子どもたちの反応を良く観察しています。「子どもの本について、自ら高い基準を保ちながらも、それを安易には信じず、常に自分を疑って出発点に立ち返る」そういう空間としてかつら文庫が必要だったのではないかと思います。かつら文庫を始めたとき、石井さんは51歳。ここからまたぐっとアクセルを踏み込んで、生涯現役で活動なさいました。

* アジア財団：アジア諸国の社会・教育開発を目的に、1952年に設立されたアメリカの事業財団



(写真提供／公益財団法人 東京子ども図書館)

おわりに

僕は子ども時代に本を読んでいるのがとても幸せでした。そのときに読んでいた、例えば『エルマーのぼうけん』とか『ドリトル先生』とか、全部、石井さんの息のかかった本でした。この嬉しかった気持ちを少しでも次の世代に伝えたい、石井さんのことを知ってもらいたいと思って映画を作りました。本日はどうもありがとうございました。